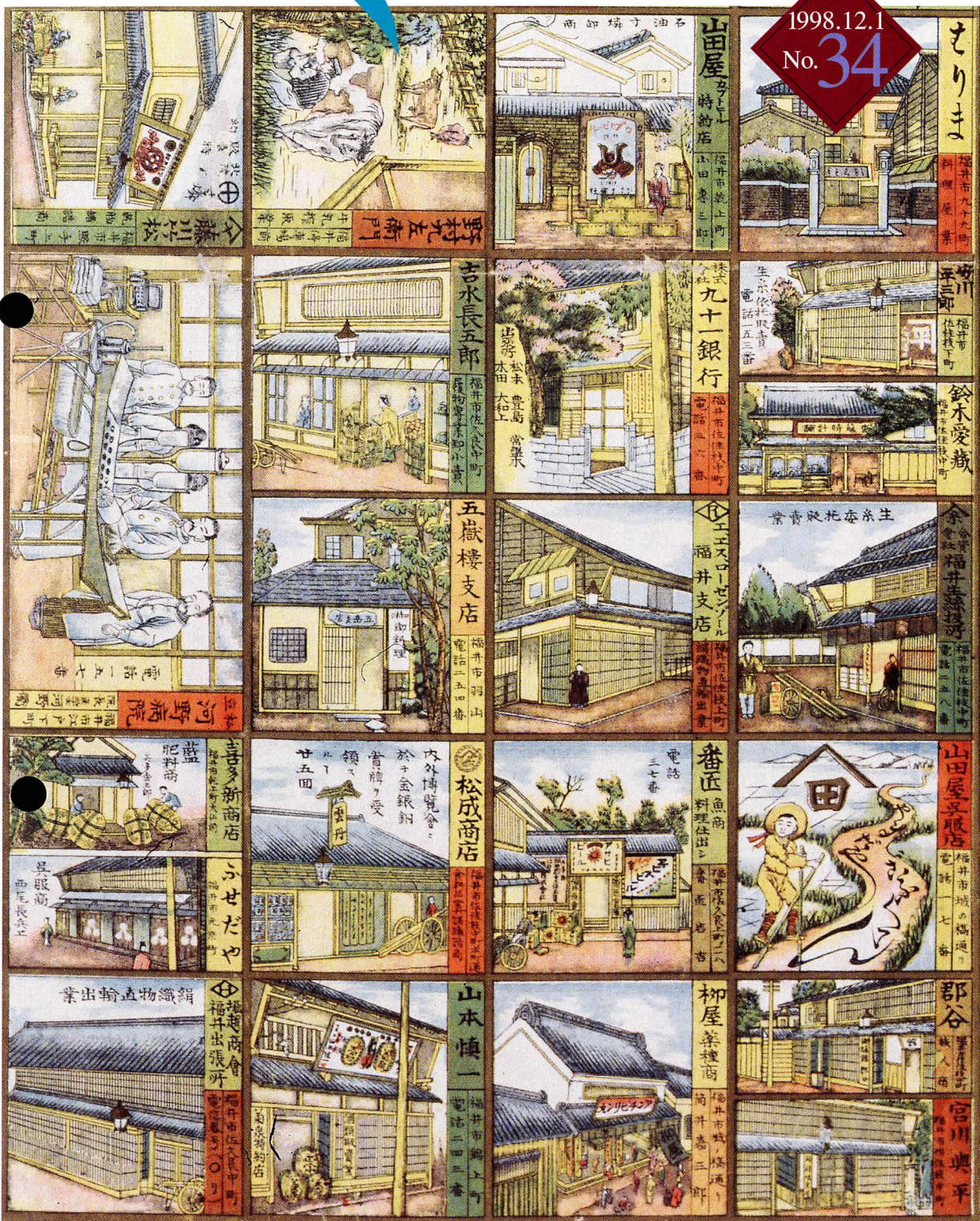


ふくいミュージアム

1998.12.1
No. 34



「福井県実業家案内すご録」部分

古代の文献と考古学

中司 照世

1

近年、古代の文献の記載と合致するいくつかの考古学的事実が確認されつつある。たとえば、福井県に関連することでは、『日本書紀』雄略8年条に、膳臣斑鳩が吉備臣小梨らとともに朝鮮半島に出兵、高麗(高句麗)軍から新羅を救援したという記述がある。膳臣は若狭地方の大首長であろうと思えるが、その当時の大首長墳としては、福井県遠敷郡上中町の脇袋古墳群内の西塚古墳が該当するものと推定しうる。当古墳では、吉備臣が蟠踞していた吉備地方(岡山県)で製作されたと推測しうる埴輪も混在し、また、半島からの渡来品も副葬され、さらに、5世紀中葉前後に活躍した人が埋葬されるにふさわしい時期である同後葉の土器も出土するなど、まさに記載内容と符合している。よって、当古墳の被葬者こそ膳臣斑鳩その人ではないか、と考えざるをえない。

ただ、『小浜市史』では、上中町に散在する複数の大型墳の被葬者を、従来の通説に従って安易に膳臣とすることに懸念を表している。それでも、『先代旧事本紀』『高橋氏文』等の記載からみて若狭地方の大首長はまず膳臣と考えられること、脇袋古墳群の所在する裏山が「膳部山」と呼ばれていること、『日本書紀』には膳臣の朝鮮半島での活躍が伝えられていること、西塚古墳のみならず周辺部で時期的に先後する主要古墳にも半島からの渡来品の混在が顕著であることなどを勘案すると、若狭中央部の大型墳は膳臣一族の歴代の墓であろうとする見解をあなたがち牽強付会とはいいがたいではなからうか。ちなみに、膳臣は斑鳩以外でも半島での活躍記事が散見されるが、若狭は畿内や吉備・筑紫・紀伊の各地方とともに、渡来品が古墳などから高い頻度で出土するわが国でも数少ない

地方である。

また、若狭地方は、本州では最も早く朝鮮半島伝来の埋葬設備である横穴式石室が採用された地方の一つでもある。そして、畿内系石室に転換する以前の時期の主な古墳の横穴式石室はいずれも北部九州系である。ゆえに、若狭から半島へ至るには直接渡海するのが最短距離であるけれども、対馬海流に逆らう形で渡海するのではなく、陸地伝いに一旦北部九州まで航行して集結後、改めてより大きな船団を組んで沖ノ島・対馬など島伝いに渡海したのではないか、と推測しうる。だとすれば、北部九州の豪族との交流の機会は十分に考えうる。

うかつなことであるが、考古学的事象からそうした推論に至った後に、膳臣らの記述の直後にあたる雄略9年条に、胸方神(九州北岸部の福岡県宗像郡玄海町やその北方の大島・沖ノ島などに神社が所在)を祀る使いがヤマトから派遣されたことが記されていることに気づいた。宗像大社は、西日本屈指の海の守護神にほかならない。また、宗像大社の沖津宮は沖ノ島に鎮座するが、同島からは発掘で多数の古代の供献品が検出されており、その多くが国宝に指定されていることは周知のとおりである。

2

さて、『日本書紀』によると、歴代の膳臣に関しては、朝鮮半島で活躍したという点以外にも注目すべき箇所が多い。たとえば、雄略紀の膳臣斑鳩は、吉備地方の大豪族である吉備臣のみならず畿内の主要豪族である難波吉士をも含む計3人でともに將軍として出兵している。そ

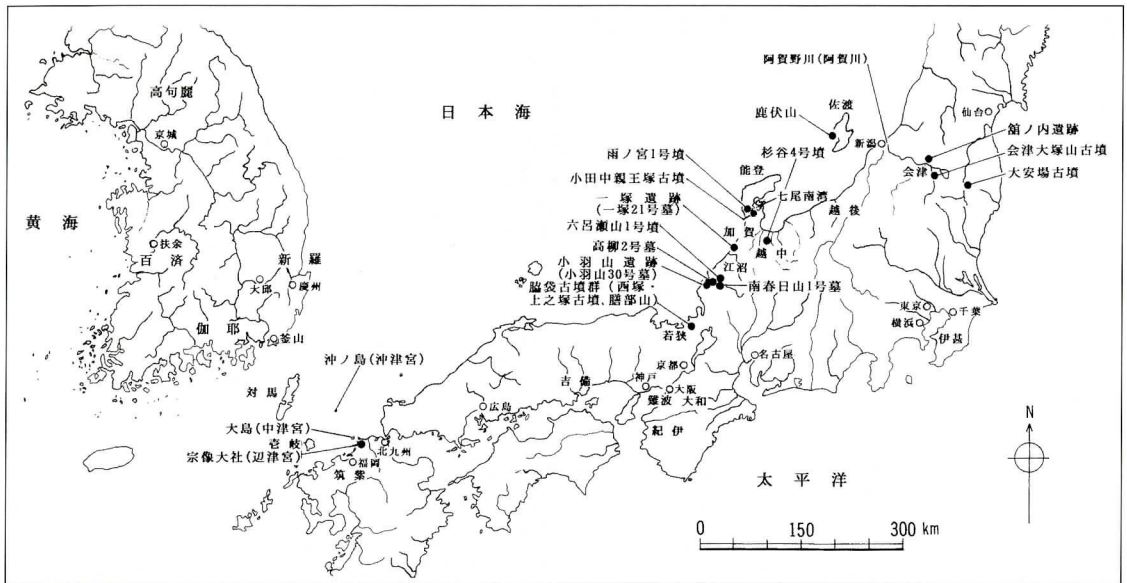


図1 関連遺跡等位置図(縮尺1/1100万)

して、私見のとおり膳臣が若狭地方の大首長であるとしても、後の律令制下でも遠敷・三方のわずか2郡(大飯郡分立後でも3郡)のみという狭隘な地方の大首長に過ぎぬにもかかわらず、筆頭に名が記されている。また、安閑紀には、上総地方(千葉県)の伊碁国造が珠を納めるのが遅れたさい問責にあたったことや、さらに欽明紀には、加賀地方の豪族である道君が高麗の使節の貢物を詐取したという同じく同地方の豪族である江沼(江沼)臣の訴えて加賀に派遣されたことが記されている。つまり、国内での活躍も少なくなく、地方豪族に対するヤマト王権の使臣としての役割を果たしている。

ここで改めて膳臣の系譜を遡ると、崇神紀のいわゆる「四道將軍」の記事が頭頭に浮かぶ。よく知られているように、これは未だヤマト王権に従わない各地の豪族を平定するため、北陸・東海・西道・丹波の四道にそれぞれ將軍が派遣されたもので、そのうち北陸には大彦命(『古事記』では大毘古命)が、東海にはその子の武渚川別命(同じく建沼河別命)が派遣されたと記されている。ちなみに、『古事記』崇神天皇段によれば、この父子はやがて相津(福島県の会津盆地)で再会し、それが会津の地名発祥の由来となったという。そうした記載をそのまま事実と信じるには問題が残るが、膳臣は北陸道に派遣されたという大彦命の子であり、かつ、武渚川別命(阿倍臣等の祖)の兄弟である比古伊那許士別命に発するという記述は見逃しがたい(参考までに、武渚川別命や比古伊那許士別命は崇神天皇の叔父にあたる)。

なぜなら、考古学界では一般に大規模な古墳は大部分が3段築成であるかのような理解が浸透しつつある。しかし、筆者は、畿内はともあれ畿外では3段築成の古墳はき

わめて稀であり、存在する場合には大王(天皇)家とのなんらかの傳承を有する例が少なからず見られることから、3段築成は大王家を中心としたごく一部の豪族のみが使用しえた蓋然性が強いと考えている。コシ(越)では、最大の古墳である福井県坂井郡丸岡町の六呂瀬山1号墳(全長140m)を初めとして、越前地方から越後地方にかけて段築をもつ古墳はいずれも2段築成であり、3段築成の確認例は存在しない。ただ、コシに南接する若狭地方では、先年の発掘で3段築成であることが確定した上中町の上之塚古墳(全長約100m)を初めとして、3段築成の古墳が複数存在する可能性が強い。畿外としては異例の地域であるが、その点でも被葬者が膳臣一族で、しかも大王家に発するという系譜が事実であるならば、矛盾点が少ないことになる。

ところで、ここ数年それ以外にもいくつかの興味深い考古学的成果が明らかになっている。その内北陸にも関係する問題を取りあげると、たとえば福島県会津若松市の会津大塚山古墳からは、初期ヤマト王権の勢力伸長を示す配布品といわれる三角縁神獸鏡が出土しており、会津盆地はその分布域の北限として知られていた。同様な配布品に、鋳形石・車輪石・石釧の3種からなる腕輪形石製品があるが、平成9年同県郡山市の大安場古墳からその内の一種である車輪石(1個)が出土した。従来知られていた古墳出土の腕輪形石製品の分布の北限が栃木県であるので、より北方域まで広がり、三角縁神獸鏡と同様な分布圏であることが明確になったわけである。

一方、日本海側における分布の北限は、三角縁神獸鏡が石川県鹿島郡鹿島町の小田中親王塚古墳の出土品である。また、腕輪形石製品も、確かな例としては同古墳の

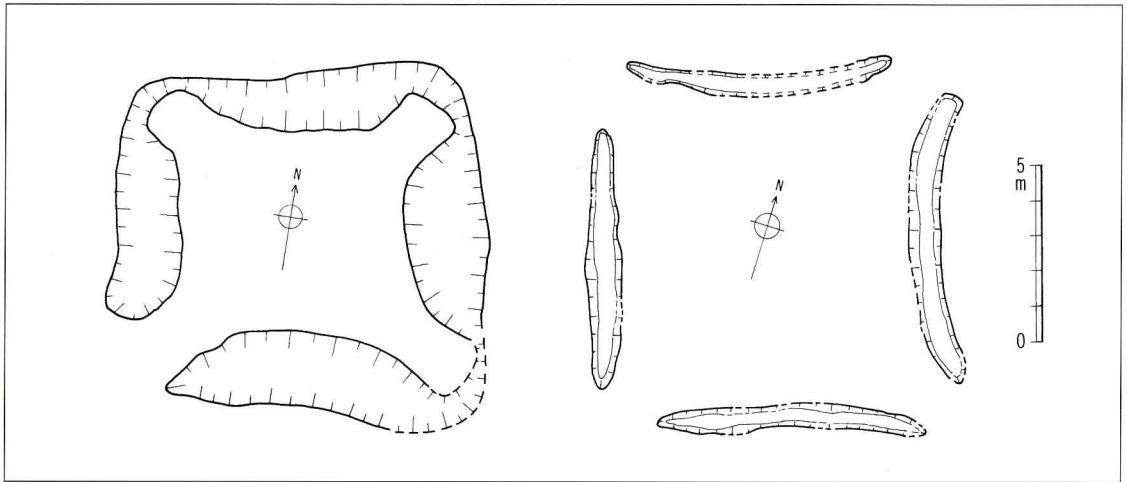


図2 高柳2号墓(左) 館ノ内1号周溝墓(右) 実測図(縮尺1/200 『現地説明会資料』『報告書』より改変・転載)

鉄形石(1個)がある。ただ、遺跡の実態が未詳なため従来から等閑視されがちであったが、より北方の出土例として佐渡島南西端に位置する新潟県佐渡郡相川町鹿伏山の車輪石(1個)の存在が、以前から知られていた。だが、平成8年の石川県鹿島郡鹿西町の雨ノ宮1号墳の発掘で、車輪石(4個)や石釧(15個)など多数の腕輪形石製品が出土し、研究者を驚かせた。当古墳は、小田中親王塚古墳に後続する能登地方の大首長墳ではあるが、畿外としてはその数の多さは異例といえる。斉明紀6年条には、能登の豪族の能登臣が中央豪族の阿倍臣の船団に随行、肅慎と戦ったという記述がある。ヤマトの軍隊が北陸道を経由して北上するには、越中地方からそのまま陸路により越後地方に越えるのははなはだ困難であり、能登臣等の船団もまず七尾南湾周辺域から船出したものと思える。ゆえに、それ以前の早い時期から能登がヤマト王権の橋頭堡であったのではないかと想定されていた。今回の発見は、まさにそうした見解を実証し、補強するような調査結果だったからである。

さらに、弥生時代から中国山地を含む山陰を中心とする地方において、四隅突出型墳丘墓と呼ばれる地方色豊かな墳丘墓が盛行していた。この種の墳丘墓は北陸にも伝播しており、石川県下では松任市の一塚21号墓や、富山県下では富山市の杉谷4号墳を初めとして呉羽山丘陵周辺部に計5基の、弥生時代後期から古墳時代初めに属す例が確認されていた。しかし、従来空白であった福井県でもここ数年発見が相つぎ、丹生郡清水町小羽山遺跡で小羽山30号墓を初めとする計6基や、吉田郡松岡町の南春日山1号墓などの存在が明らかになった。そして、昨年には福井市の高柳遺跡で、四隅突出型の方形周溝墓である高柳2号墓が水田下から検出されるに至った。

実は、会津盆地では、ここ数年の調査で古墳時代初期の北陸系土器やこの時期前後の北陸の地場産業ともいえ

る玉作り遺跡の検出があり、北陸系の文化の流入が目目されてきた。その後、平成8年には当盆地内の福島県耶麻郡塩川町館ノ内遺跡で、水田下から外周の溝が外湾する方形周溝墓2基が検出され、山陰を発源地とする四隅突出型墳丘墓がはるかに東北まで伝播した珍しい例ではないかと推定されていた。すなわち、高柳遺跡の新発見により、館ノ内遺跡の方形周溝墓が山陰の四隅突出型墳丘墓の伝播したものである可能性がより一層濃厚になり、伝来したルートもより実証的になったわけである。

こうしてみると、崇神朝における四道將軍の派遣が事実であるかどうかはともかく、畿内古墳文化の会津盆地への伝播には東海道等を経由するルートと北陸道を経由するルートとの主に2ルートを想起しうるが、後者をたどるさいには越前・加賀を経由して能登で出航、佐渡(島)を中継地として越後に再上陸後、阿賀野川(阿賀川)流域を遡って会津盆地へ至ったのではないかと推論しうる。そして、より早い古墳時代初頭における山陰・北陸系文化の流入の事実から、既にそれ以前から北陸ルートを経由した部族間の交流があったことを想定しうる。

3

近年の発掘例から、『記紀』等の記載と符合する考古学的事実や関連する調査例を取りあげて、想像の翼を広げた。ここでは主に北陸の古墳時代に関連するものに限定して、しかも、主要な一部についてのみ言及したが、それ以外にまで対象範囲を広げるとさらに多くの事例を列挙しうる。いずれにしても、今後における発掘成果の増大と文献との相互の検証が待たれる。そのことにより、古代史像はより豊かなものになるであろう。

福井市新溜古墳出土の玉類

—— 中原義史

はじめに

福井市街から東に10kmほど、篠尾集落の南に新溜古墳があります。1962年、土取り作業中にここから石棺が出土し、急ぎよ調査が行われました。古墳全体を対象とするものではなく、石棺内部の精査が中心でした。石棺内からは、人骨5～6体分、勾玉1点、管玉2点、鏡片、銅釦片？、鹿角製刀装具片のほか、鉄片・須恵器片が出土しました。また、石棺外からは土師器が3点出土しました。石棺は、身と蓋がしっかり合わさっていましたが、遺物の状況から調査担当者は盗掘を受けていると判断しています。

出土資料は個人蔵となっていますが、このたび勾玉と管玉が当博物館に寄託されました。また、石棺は以前に寄贈を受けています。新溜古墳の調査結果は、1982年に公表されていますが、それは石棺についての記述が中心で、勾玉や管玉については、写真や図面も掲載されていません。そこで、改めてこれらの玉類の紹介を行おうと思います。

玉類とその年代

勾玉は、長さ4.1cm、最大厚1.6cmで、頭部を若干尖り気味に仕上げています。石材はヒスイで、全体的に淡緑色を呈し、白色で不透明な部分と緑色で透明感のある部分が不規則に分布しています。表面は丁寧に磨かれ光沢がありますが、孔の周囲などに何かに擦れた痕跡が残っています。頭部の孔は、片側から錐であけられています。

管玉は2点あり、1点は長さ4.3cm、直径1.1cm、もう1点は長さ3.9cm、直径0.9cmです。ともに石材は珪質緑色凝灰岩で、濃緑色を呈しています。表面は丁寧に磨かれ光沢がありますが、両端部には欠けた部分が見られます。孔は、管玉長軸の中央部で若干食い違っており、両側から



図1 勾玉



図2 管玉

錐であけられたものと考えられます。

では、これらの玉類はいつごろのものでしょうか。玉類の年代は、それ自体から細かく判定するのは難しく、一緒に出土した土器の年代を参考にする場合がほとんどです。石棺内から出土した須恵器片は小片であり、年代を決める資料にはなりませんでした。いっぽう、石棺外から出土した土師器は、6世紀前半のものと考えられます。また、石棺も製作技法や形態の比較検討から、6世紀前半のものという説が有力になっています。

このことから、新溜古墳は6世紀前半に造られ、その後死者がでるたびに、石棺のふたを

開けては埋葬をしたと考えることができます。玉類が、いつ埋葬されたどの人骨に伴うのか、今となっては確認する手段がありません。広く6世紀代のものであると考えておくしかないでしょう。

なお、三方町きよしの2号墳出土のヒスイ製勾玉は、その形態が新溜古墳のものと類似しています。この古墳は6世紀後半のものと考えられています。

玉類の産地

さて次に、これらの玉類の産地について考えてみます。日本国内にヒスイの産地は数か所ありますが、古代に玉の素材として使われたのは、新潟県糸魚川市の姫川周辺で産出するものだけです。姫川や青海川の露頭から流されたヒスイ原石は海に出て、富山県・新潟県境周辺の海岸に打ち上げられます。古代の人びとは、これを拾って玉の素材にしていました。この地域では、縄文時代から古墳時代にかけて、ヒスイ製玉類の製作を中心的行なっていました。

また、古墳時代中～後期には、奈良県橿原市の曾我遺跡でもヒスイ製玉類が製作されています。石材をわざわざ糸魚川周辺から運び、当時の政権中枢の需要に応える生産を行っていたようです。ここから、列島各地の有力者の元へ配られた玉類もあったことでしょう。ヒスイ製勾玉の産地は、おもにこの2つが考えられます。

いっぽう、珪質緑色凝灰岩製管玉については、北陸で古墳時代後期にそれを製作した遺跡はまだ見つかりません。この当時の管玉産地としては、出雲（島根県玉湯町出雲玉作遺跡など）・大和（曾我遺跡）そして武蔵（埼玉県川島町正直遺跡）が挙げられます。古墳時代前期までと異なり、この時期の管玉産地は限られており、その製品がかなり広域に流通したと考えられています。新溜古墳の管玉は、どこで作られたのでしょうか。

おわりに

新溜古墳は円墳と考えられますが、現在墳丘がほとんど残っておらず、その正確な規模は不明です。また、副葬品も玉類と鏡・刀・須恵器などで、その質や量は同時代の古墳の中でとくに傑出したものではありません。しか

し、当時の越前で石棺を持つ古墳が非常に少ないことを考えると、この地域でもかなり有力な人物が葬られたと考えられます。新溜古墳は、県内最大規模を持つ酒生古墳群内に位置しており、その首長の墓であるという説があります。そのような人物の元へ、これらの玉類がどのようなルートでもたらされたのか、今後考えていきたい点です。

注

- (1) 斎藤 優 「越前・福井市篠尾の新溜石棺」
〔『古代学研究』第97号 古代学研究会〕1982
- (2) 前掲報告中には、「勾玉は白色不透明で多少線が見えていたから硬玉ではあるまいかと推測したが、自信がなくて一応瑪瑙と判定した。」とあります。しかし、原資料は淡緑色を呈し、明らかにヒスイと判断できるものなので、この記述とは食い違いがみられます。
- (3) 白崎 卓「福井県における舟型石棺の変遷について」
〔『福井考古学会誌』第5号 福井考古学会〕1987
- (4) 三方町教育委員会 『若狭きよしの古墳群』1975
- (5) 福井県立博物館 特別展図録
『北陸の玉—古代のアクセサリー—』1994
- (6) 関川尚功 「玉とガラス」
〔『古墳時代の研究』5 雄山閣〕1991
- (7) 島根県教育委員会・朝日新聞社 特別展図録
『古代出雲文化展—神々の国 悠久の遺産—』1997
- (8) 大田区立郷土博物館
特別展図録『製作工程の考古学』1998
- (9) 中司照世 「IV 古墳時代」
〔『図説 発掘が語る日本史』3 新人物往来社〕1986

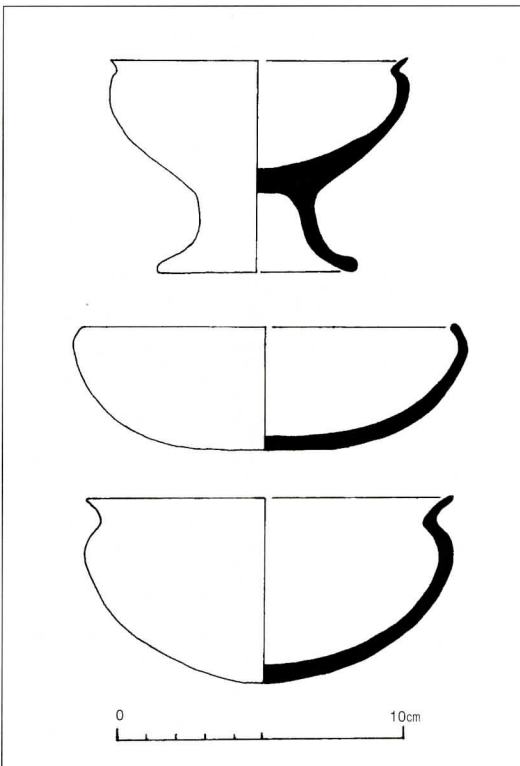


図3 出土土師器実測図（注1文献より再トレース）

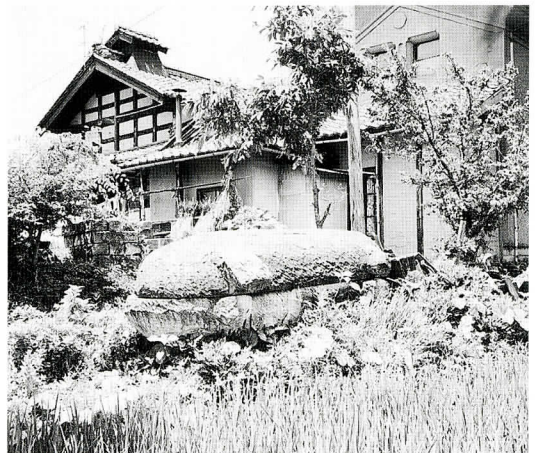


図4 石棺（原所蔵者宅にて）

友の会 会員募集

こんな特典があります

- 博物館と友の会の行事をもれなくご案内します。
- 常設展示を何度でも無料で観覧できます。(家族会員は1度に4名まで)
- 特別展は1度無料で観覧できます。(家族会員は計2名)
- 研修旅行・見学会に参加できます。(有料)
- 館の広報誌「ふくいミュージアム」をお届けします。

会費(1年分)

一般/2,500円
中学生・小学生/1,000円
大学生・高校生/2,000円
家族/5,000円
賛助会員/(一口)10,000円

期間

1999年4月1日～2000年3月31日

入会方法

入会申込書(博物館にあります)にご記入のうえ、会費を次のいずれかの方法で入金してください。

- 直接、博物館内友の会事務局へ
- お近くの郵便局から郵便振替で(申込書は別送)
口座番号/00750-9-23379
加入者名/福井県立博物館友の会
- 現金書留で郵送(申込書を同封)

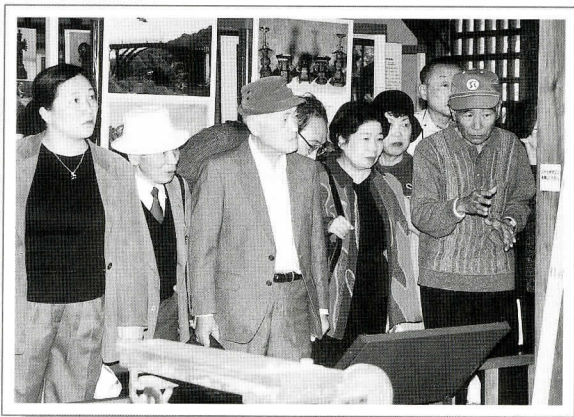
入会手続き終了後、
会員証をお渡しします



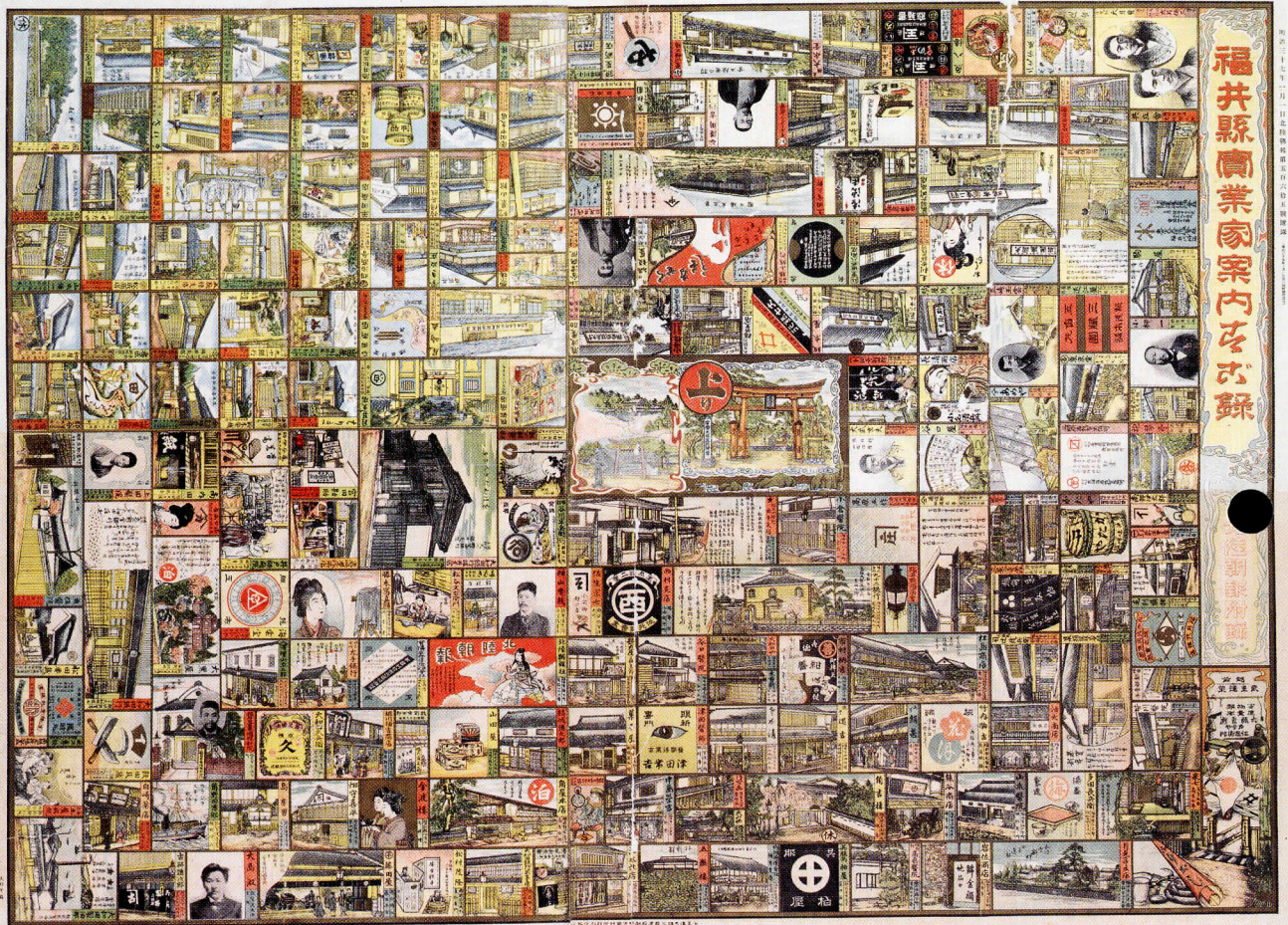
研修旅行(滋賀県安土城考古博物館)



古文書学習会



研修旅行(大阪府枚方市鑄物民俗資料館)



表紙解説

「福井縣実業家案内すご録」

(縦85cm、横118cm)

この双六(すごろく)は、明治37年(1904)元旦の新聞「北陸朝報(ほくりくちょうほう)」の付録として発行されたものです。当時としてはめずらしいカラー印刷になっています。内容は、武生町の金物商カラヤ仁左衛門を「ふり出し」に、当時の福井県内のさまざまな実業家をたどって、敦賀気比神宮の「上り」に到着する図式になっています。

す。なかには 200近くの商店、工場、銀行、旅館などが描かれおり、その大半は福井市に所在するものです。ついで敦賀、武生、鯖江、勝山の順になっています。このうち福井市には、生糸商や織物商が目立って多く見られます。この時期、本県はわが国でも有数の輸出絹織物(とくに羽二重)産地として発展の一途をたどっていました。双六の画面には、織物業を中心に賑わいをみせる福井の商業界のようすが描き出されています。



No.34 1998.12.1発行



編集発行

福井県立博物館

〒910-0016 福井市大宮2丁目19-15
☎0776-22-4675(代)